

## 春告草

第138号 平成31年4月17日 進路指導部発行

## 2019年度大学入試を振り返る(国公立大学編)

新年度が始まり、早一週間です。学習、部活動など学校生活は順調にスタートできたでしょうか。大学入試に関してはセンター試験最後の年となり、5年生からは新テスト「大学入学共通テスト」を受験します。年度初めにあたって、今年度の大学入試を振り返っておきましょう。

## 国公立大入試全般

今回は国公立大入試を振り返ります。入試日程別の志願状況は図1(数値は前年度志願者に対する比率%)に示したように、公立大中期の増加が目立ちます。また、増減(%)を国立・公立を日程別に比べると(国立、公立)の順に前期(-0.4、+2.2)、後期(+0.5、+1.6)となっています。前期試験は国立から公立へ流れる一方、後期試験は国立・公立ともに最後まで粘ろうという受験生が多かった様子が分かります。

もう少し細かく見ていきましょう。今年度の国公立大入試に影響を与えた要素は次の4点が指摘されています。

①**入学定員の厳格化** 私立大では定員超過率の厳しい抑制が続いています。知っている人も多いと思いますが、入学定員を上回って入学者を出した私立大には、助成金をカットするというものです。大都市圏の大規模校ほどこの規制が厳しく、このことで昨年度入試では首都圏私大が難化した状況がありました。補欠候補者数が少なかった、補欠だったが合格通知がこなかったことなどが多くの大学で見られました。このため今年度入試では、難関私立大の出願を控える傾向が前年以上に顕著だったようです。難関私大を敬遠し、公立大中期、国公立中堅大へ出願した受験生が多かったようです。

②**新テスト** 新テスト実施など、入試改革が進められている中、現役生は浪人すると「後がない」入試として激戦化するであろう20年度入試(6年生受験年度)に直面します。過度な反応と言えなくもありませんが、こういった超安全志向が中期・後期試験まで粘る意識に結びつくとみられています。

③**センター試験の易化** センター試験の平均点アップが、国公立大志向を後押しした模様です。裏面に今年のセンター試験の平均点を掲載しましたが、国語と英語リスニングが大幅にアップし、総合の平均点は国公立文系で+17点、国公立理系で+11点の上昇につながりました。これにより受験生に国公立大を受験する意欲が高まり、ボーダー付近の学力層は公立大を中心に積極的に出願したものとみられます。超安全志向から1ランク上は目指さず、センター試験の持ち点を生かし、初志貫徹ながら堅実な出願に結びつくとみられます。

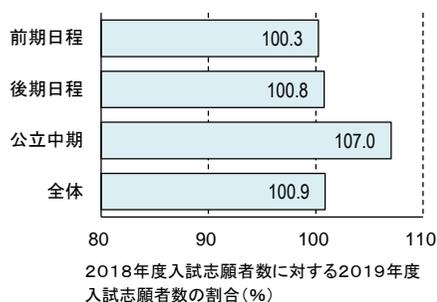
④**公立大中期試験の増加** 推薦・AO入試の募集枠の拡大により、後期日程試験は廃止、募集人員の減少が続く、全体として後期の募集枠は縮小されています。それを補い、併願先として存在感を高めているのが公立大中期日程試験です。首都圏受験生には馴染みが薄いのですが、諏訪東京理科大が今年度入試から公立になるなど、私立大の公立大化を含めて10年前の12大学から20大学まで増えている状況があります。

## 難関国立大は志願者減

旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況は表1のとおりで、前期試験に関しては、これら10大学全体で1,271人、前年比97.9%の志願者減となりました。

以下、東京都内の大学を個別にみていきましょう。

図1 国公立大入試 日程別志願状況



**東京大学** 大学全体の志願者数は98.0%と減少し、科類別にみても文科一類を除き減少した。文科類では文一が3年連続で増加し、前年比106.3%と増加幅も大きい。文二は前年比98.5%、文三も同97.2%と減少した。センター高得点層が、志望を変えずにそのまま文一に出願したとみられる。理科類では理三が志願者大幅減となった前年からさらに1割減少した。昨年度入試から導入された面接試験に加え、第一段階選抜の実施倍率が4倍から3.5倍に引き下げられたことが志願者減の要因の一つとみられるが、全国的な医学科不人気もあり、東大理三も例外ではないようだ。理一は前年比97.4%、理二も同95.7%で、前年の反動によるものとみられる。

**一橋大学** 前期日程の志願者数は前年比91.6%で難関10大学の中では最も高い減少率となった。学部別では商学部を除き志願者は減少した。近年一橋大は、志願者数の増減を繰り返す隔年減少がみられ、経済、社会学部は減少年にあっていた。社会学部は前年比78.1%の激減だったが、平均点がダウンしたセンター理科の配点率が高いことも志願者減の要因と思われる（センター180点中、理科の配点100点、生物基礎-4.6点）。また、経済学部のみで実施する後期日程は、前年入試で難化した反動からか、志願者数は前年比93.5%と大きく減少した。

**東京工業大学** 今年度入試より類別募集から学院別募集へと変更になり、前期日程は6つの学院から希望する順に3学院を選択して出願し、全学一括で選抜が行われた。学費の値上げ(53.6万円→63.5万円)もあったが、影響は少なかった。学院別の志願状況を見ると最も志願者を集めたのは工学院(1,520人)で、次いで情報理工学院(843人)となった。情報理工学院の志願倍率は9.80倍(募集人員86名)で、他学院と比較しても群を抜いて高い倍率である。逆に志願倍率が最も低かったのは生命理工学院(2.49倍)である。後期日程は生命理工学院のみの実施で、志願者は前年比106.0%と増加した。

**電気通信大学** 準難関国公立&電子情報系人気の波に乗り、前期は106.6%と増加し、後期も99.6%の微減に止まった。女子学生が増えると、真面目な男子学生も増えるとかで、女子学生の就学を支援する体制は厚いものがある。東工大同様に学部・学科を廃止し、大学院までの研究を見据えた組織編成が好材料となっている。

**東京外国語大学** 新設の国際日本学部は、個別試験の英語スピーキングテストが敬遠され、志願倍率は3.3倍に止まった。既設の2学部は定員減と推薦枠拡大に伴う一般入試の募集枠縮小(言語文化(前)343→290、国際社会(前)251→254・(後)109→56)があった。このため、言語文化(前)83.7%、国際社会(後)97.6%と減少したが、国際社会(前)は101.4%と微増した。

**東京海洋大学** 海洋生命科学、海洋資源環境は前年までの経過措置が廃止され、出願資格の英語検定が必須となった。これが敬遠材料となり、海洋生命科学(前)93.9%、海洋資源環境(前)90.2%、同(後)86.0%と志願者減となった。海洋生命科学(後)108.7%の増加は前年の反動とみられる。海洋工(前)99.3%は前年並みだが、同(後)の大幅増135.1%は前年の反動とみられる。

**東京農工大学** 全学で志願者は前年比87.2%と減少した。工を8→6学科に再編し、募集人員を「前期→後期」に移行(前期326→284、後期160→183)したが、前年の反動もあり、工(前)で84.4%と志願者減。募集人員増の工(後)も前年の反動が大きく81.2%の志願者減となった。後期の募集枠増の周知が不十分だったのかもしれない。農は前年の反動で前期が104.6%と微増し、後期では87.8%と減少した。

**首都大学東京** 昨年度、都市教養学部を4学部に分割した。2年目を迎え認知度も高まり、人文社会(後)126.5%、法(前)137.2%、理(前)106.3%、同(後)128.5%など志願者増となった。一方、人文社会(前)は78.6%と大幅減となった。センター高得点上位大学への志望変更が多かったとみられる。経済経営(後)の大幅減47.2%は、センター試験の数学の高配点(400点/1000点満点)が敬遠された模様だ。この他、前年の反動から、健康福祉(後)で志願者増、都市環境(後)・システムデザイン(前)で減少した。

表1 国立難関10大学出願状況

大学名	前期日程試験		後期日程試験	
	志願者数	前年比	志願者数	前年比
北海道大	5,843	100.2	4,498	112.0
東北大	4,813	91.8	1,439	102.9
東京大	9,483	98.0	—	—
東京工業大	4,222	99.8	497	106.0
一橋大	2,687	91.6	1,123	93.5
名古屋大	4,736	99.7	67	126.4
京都大	7,511	95.5	514	138.2
大阪大	7,536	95.8	—	—
神戸大	5,933	105.3	4,026	92.6
九州大	5,239	99.9	2,309	93.1
難関10大学計	58,000	97.9	14,473	101.0
その他国公立大計	200,532	101.0	165,141	100.8

# 大学入試の基礎知識(第2回)

連載2回目は、センター試験について説明します。30年目を迎えるセンター試験も次回で廃止され、センター試験ラストイヤーとなった。新テストでは記述式問題の導入や英語外部検定利用などが注目されていますが、センター試験（共通テスト）と個別試験の総合成績で合否が判定されるという国公立大の入試システムに変更はありません。4、5年生もまずは現行のセンター試験の役割や日程などをチェックしておきましょう。

## テーマ センター試験と共通テスト

### ■役割と日程

センター試験は高校での学習の到達度をみる学力試験のことであり、これを合否判定に利用する大学が大学入試センターと協力して毎年実施されている。

センター試験の受験手続きの詳細をまとめた「受験案内」（出願書類）を6年生には9月上旬に学校で配付するが、最寄りの大学でも入手できる。現役生の出願手続きは、受験票の交付も含めてすべて在籍校を通して行われることになっている。センター試験の本試験は1月13日以降の最初の土日と定められていて、今年度は18日、19日である。共通テストの日程や手続きはまだ発表されていないが、センター試験と同様と思われる。

### ■出題形式と対策

国公立大入試は「センター試験と個別試験の成績を総合して合否を判定する」ので、センター試験対策は重要である。全問マークシート形式であるが、新テストでは一部の科目で記述形式の問題が取り入れられる。早期からセンター対策に特化した学習は不要だが、問題数が多いので受験直前期にはセンター形式の問題演習は必要である。

今年のセンター試験の情報は第131号～134号に掲載したとおりだが、7期生も後期課程に加わったこともあるので、改めて平均点を再掲した。見れば分かるように、平均点はどの科目も60点前後であり、年度によっては70点を超えている科目もある。したがって難関大を目指すのであれば、8割以上は得点したい。東大の第一段階選抜のデータを次頁に掲載したが、文科三類の合格ラインは83.3%だ。これ以下では「足切り」され、今年はい個別試験受験前に822人が「不合格」となった。

センター試験で目標点を獲得した人の多くはセンター試験の過去問や予想問題などを使って、制限時間よりも短い時間で問題を解く訓練をしている。これは、出題傾向をつかむと同時に、問題数が多いと指摘されるセンター試験の「量」への対策といえる。

大学入試センターのホームページではリスニングテスト音声を聞くこともできる。是非、閲覧してみよう。

### ■センター試験+個別試験で合否判定

国公立大は「センター試験と個別試験の成績を総合して合否判定」と書いたが、センター試験と個別試験の比重（配点比）は大学毎に決められている。今年度入試では（センター試験：

大学入試センター試験受験スケジュール

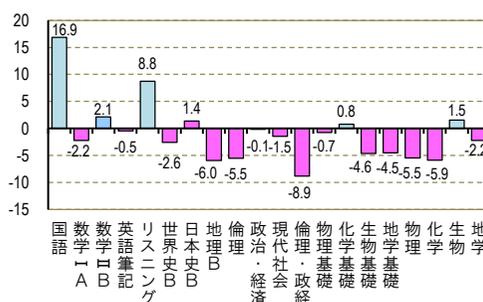
2019年		
在籍校を通して	9月上旬～	受験案内配付
	9月上旬～10月上旬頃	検定料等払込み
	9月末～10月上旬頃	出願期間
	10月末頃	確認はがき受領(登録内容確認)
	12月中旬	受験票等受領
2020年		
1/18(土)・19(日)	本試験実施・正解等の発表	
1/22(水)頃	平均点などの中間発表	
1/24(金)予定	得点調整実施の有無発表	
1/25(土)・26日(日)	追(再)試験実施	
2月上旬予定	平均点等の最終発表	
4月中旬頃	成績通知書の受領(希望者のみ)	

平成31年度センター試験平均

教科グループ	科目	配点	平均点	
			31年度	30年度
国語	国語	200	121.55	104.68
地理歴史	世界史B	100	65.36	67.97
	日本史B	100	63.54	62.19
公民	地理B	100	62.03	67.99
	現代社会	100	56.76	58.22
	倫理	100	62.25	67.78
	政治・経済	100	56.24	56.39
数学①	倫理、政経	100	64.22	73.08
	数学Ⅰ 数学A	100	59.68	61.91
数学②	数学Ⅱ 数学B	100	53.21	51.07
理科①	物理基礎	50	30.58	31.32
	化学基礎	50	31.22	30.42
	生物基礎	50	30.99	35.62
	地学基礎	50	29.62	34.13
理科②	物理	100	56.94	62.42
	化学	100	54.67	60.57
	生物	100	62.89	61.36
	地学	100	46.34	48.58
外国語	英語	200	123.30	123.75
	リスニング	50	31.42	22.67

平成31年2月7日大学入試センター発表

センター試験平均点前年差



個別試験)が、東京大学では(110:440)だが、東京外国語大学・前期では(450:400)となっている。また、同じ大学でも学部によって配点比が異なるケースもあり、一橋大学では、商学部(250:750)、経済学部・前期(210:790)、法学部(270:730)、社会学部(180:820)となっている。前期、後期で配点比が異なる場合も多く、年度によって配点比が変更されることもある。センター試験の各科目の配点比も各大学・学部で異なり、志望大学の最新情報はホームページなどで確認しておかなければいけない。例外的なのは東京工業大学で、センター試験600点以上(950点満点)が出願基準で、合否は個別試験の成績だけで決まる。

### 東京大学前期日程 第一段階選抜合格者データ

科類	志願者数	第1段階選抜合格者数	合格者平均点	合格ライン	
				得点	得点率
文一	1,407	1,204	765.14	628	69.8%
文二	1,183	1,064	794.58	728	80.9%
文三	1,492	1,408	798.20	750	83.3%
理一	2,915	2,771	799.62	698	77.6%
理二	2,081	1,874	786.59	720	80.0%
理三	405	340	801.68	630	70.0%

900点満点。全学の前期志願者総数は9,483人(前年比2.0%増)。各科目の合格率は以下の通り。文一 85.6%/文二 89.9%/文三 94.4%/理一 95.1%/理二 90.1%/理三 84.0%。

私立大入試ではセンター試験受験は必須ではないが、センター利用入試を使う場合は必要である。

## 新テストの基礎知識(第1回)

新テスト「大学入学共通テスト」実施に向けて試行調査も行われたが、具体的な内容については、未確定な部分も多い。現状で分かっていることなどを下表にまとめたが、「予定」ということで理解しておいた方が良いでしょう。確定した情報などは、今後春告草紙面で伝えていきたいと思います。

共通テストの国語記述問題は、段階別に評価され、マーク問題の得点(200点満点)と段階評価が各大学に提供される。提供された国語記述評価(A~E)利用の方向性は大学毎に決まっています。点数化し国語マーク得点に加点する大学が多いが、配点に関しては未定のところも多い。また、東北大では「合否ラインで同点者がいる場合のみ利用」と発表している。数学記述問題はマーク問題同様に全体の得点に含まれるので、従来と扱い方に変わりはない。

英語外部検定は「点数化して加点」「出願資格」「出願要件としない」など、大学により扱いは様々だ。志望大学の最新情報は各自で調べるようにしましょう。

### 「大学入学共通テスト」の概要(予定)

名称	大学入学共通テスト	大学入試センター試験
実施年度	2020年度(2021年度入試・現5年生受験年度)以降	2019年度(現6年生受験年度)まで
出題教科・科目	センター試験と同じ ※2024年度以降は簡素化を検討	6教科30科目
出題形式	国語、数学で記述式を導入 ※2024年度以降は地歴、公民、理科も検討 【国語】・80字~120字程度の問題を含む3問程度 ・出題範囲は「国語総合」(古漢を除く) ・マークシート問題とは別の大問 ・試験時間は100分に延長 【数学】・「数I」「数I・数A」で出題 ・数Iの範囲を3問程度 ・マークシート問題と混在の出題 ・試験時間は70分に延長	マークシート方式
英語	4技能(読む・聞く・話す・書く)を評価、民間の試験を活用 民間試験の受験は高3の4~12月に2回まで 2023年度までは民間試験と共通テストの英語を併用(大学が利用方法を指定)	2技能(Reading、Listening)を評価
成績結果・提供方法	・マーク部分は現行より詳細情報(設問・領域・分野ごとの成績、段階別表示などを検討)を提供予定 ・国語は一括提供を検討 ・英語はCEFR(※)の段階別表示 ・国語記述式問題は段階別評価(5段階 A~E)	・各科目1点刻みで採点し、合計点を提供 ・国語は「近代以降の文章」「古文」「漢文」の3分野を別々に成績提供

四年生・五年生必読

※CEFR(ヨーロッパ言語共通参照枠/Common European Framework of Reference for Languages) 外国語の学習・教授・評価(Learning Teaching Assessment)のための国際指標